The Marian

昭和40年10月11日発行

編集責任者　山仲　京子

発行者　ノートルダム女子大学同窓会

印刷所　真美印刷株式会社

題字　学長　シスター・メリー・ユージニア

To every dear Alumna,

To see you personally would, of course, be so much better than to write to you. But I amhappy to know that we shall now have a way ofkeeping in contact with oneanother. The alumnae paper which is making its debut with this first issue will keep us united with common bonds of interest. Mayit ever be a source of interest, joy, inspiration and encouragement.

Six months have already passed since you left us. I am sure you have many experiences to relate which we would like to hear. The other Sisters and I were delighted to meet so many of you at the first alumnae meeting which was held here at the college on June 27. There were several, however, whom we missed, those who live at a great distance and those who were unable to be present that day for some weighty reason or other. For your encouragement I would like to say that all the professors, teachers, and Sisters who were present really enjoyedthe afternoon with all of you. We hope the next meeting will be equally successful, and that more will be able to come.

We would like so much to continue with our building-lans. . . so many additions are still needed, namely, a library, a gymnasium, an auditorium, (which might include aspecial alumnae room), a chapel, etc., etc., but we do not have the funds necessary for such an undertaking. If you have any suggestions of ways and means for realizing our plans, we should be most happy to hear about them from you.

As I write this letter today on Mary's Day, August 15, I think of the wonderful reunion we will have in eternity when we meet with Mary and her Son, Jesus. The feast we celebrate today is that of Mary's going to heaven so you see why my thoughts very naturally turn to own future going to haven.

You are daily in our prayerful thoughts, each and every one of you as we pray the Mass together. May God's love and blessing be with you always and may our Mother Mary be your inspiration.

Always devotedly yours,

Sister Mary Eugenia, S.S.N.D.

心にひびくもの

Sister Mary Celine, R.N.D.

先日、私は本当に久しぶりに映画を見ました。今、好評をはくしている "MyFair Lady" と "The Sound of Music" です。言葉では表現出来ない、快活なリズムの躍動が、今も尚、心の奥底に残っています。真の美と愛は人間の心を動かします。どんなにひからびた乾ききった人間をも、ほどよいうるおいで、生々させ、どんなに冷い石のような固くなな人間をも、あたためほぐしやわらかくします。

"The Sound of Music" の現実にうったえる自然の美、色、形や、聴覚にひびく音の快調さ等は、感覚をよろこばすもので、〝素晴しかった〟という語のごく一部にしかすぎません。感覚を魅する手段と、ストーリーの意味を通して、その映画の中に人間性の美、人間の心のふれ合いに、新しい生きる意義をくみ取りたいと思います。神の創造の計画のままに生きる人間の姿がどんなに美しく、喜びにあふれたものであるかということが、音楽の美しいハーモニーの中にうまく織りこまれています。

修道女としての召命がなかったマリアは、最初は家庭に入って七人の子供の慈愛に満ちた、人間味のある教師として、又姉となりますが、やがては、子供達のなくてはならぬママとなり、結婚生活の中に神の計画し給う召命の道を見出します。

この "The Sound of Music" の女性、マリアの立場は、これからの卒業生の皆様のよい参考になるのではないかと思います。

何ごとも規律のきびしさのみで片附け、人間性の目的の発展の可能性を無視したかの様な、キャプテンに、心の歌、愛にみちた心のふれ合いをよみがえらせたのは、マリアでした。与えることによって、自己のありのままの姿を与えることによって、キャプテンの心のどこかに固く冷たく、凍りついていた愛を再び生かしたのです。男性に不足していた暖かい愛を惜しみなく与えて、自分にも愛を獲得したわけです。勿論ことの成行きは結婚で結ばれるわけですが、相手の中に宿る神のイメージを認める時、人間に対する愛は、神への愛にまで高められるのです。そして永遠の契をかわす男女の一致は、やがて愛の結晶となって実を結び、神の創造の御業にさえ参与することになります。マリアが白衣に身を包んで、大聖堂の中央に神の御前へと進み出る時、「神への愛のためにのみ身を献げたい」という彼女の最初の願いは、異る方法に於て、実現されるのです。たとえ、修道服に身をつつまなくても、彼女の神と人間とに対する純粋な愛は、完全ないけにえとして、捧げられたのですキャプテンの花嫁としてそして神の霊的花嫁として。

学窓を巣立って早、半年、皆様は将来の生活を夢見ながら、それぞれの道の準備にお忙しいことでしょう。どうぞ、神があなたに計画していらっしゃる道を見つけて下さい。いづれの道をえらんでも「与えることの出来る女性」になって下さい。これこそ他人のためにも自分のためにも、真の愛と幸福を見出す一つの方法です。

いづみ

ファイティング・スピリット

——ささやかな自慢ばなし——

石田幸太郎

(一)

今年の八月十五日、私は満七十一歳になりました。八月十五日というと終戦記念日です。私の誕生日が終戦記念日に当るということは、単に偶然の一致に過ぎませんが、戦争はもとより、戦争的なもの、いや喧嘩、口論でさえ大嫌いな私にとっては何か因縁があるような気もします。私はこの七十一年余の間に、筆の上での理論のやりとりは、むろん何度もしましたが、口論らしいことは、遂に一度もしなかったように思います。ファイトがないのかというと、どうしてどうして大変なファイトがあるのです。ファイティング・スピリットそのものといっても言い過ぎではありません。例をあげると碁は今日めったに打ちませんが、挑戦されれば、日々の仕事に差支えぬかぎり相手になります。一年に五目位は打つことになりましょう。素人の五段の免状を日本棋院からもらっていますが、めったに負けません。ファイトなしでは碁は勝てないものです。むろん、冷静に、科学的に考えてやるのですが、その底にかなりのファイトがあるはずです。私と碁を戦わす人は、私があまりに体格が小さくまた碁を打つらしくも見えないので、馬鹿にして打ち始めるのですが、そのうちに私の打つ手が案外きびしく、相手の痛いところをえぐるので、急にあわて出し、おびえたような気持になるのだそうです。そうすると、チョコンと座っている私がとても大きく見えてくると話した人もいました。その時の私はファイトのかたまりになっているのでしょう。

私はこのファイトを、子供の時からもっていました。生れた時四五〇匁しかなかったのです。育つかどうか両親とも大変心配であったといっています。これが何とか育ったのは母のファイトによるのです。しかし、中学生になるまでは、一年の半分は病気でねていました。しかし寝ながらウンと本を読みました。それが私の幼時のファイトというものでしょう、小学生時代にはもう明治時代のそれまでに出た小説はほとんど読んでしまいましたし、古典の文学にも親しんでいました。だから国語と英語では、三高の入学試験を受けたとき、少しも苦労しませんでした。英語は中学校でウンと勉強しました。私はその時その時の一つの仕事に一生懸命になる性質です。両人の恋人を同時にはもてないタチです。碁を打つ時は、外の事は一切意識にのぼりません。必死にいい手を考えるのです。英語の勉強をしていた時もそうでした。英語の辞書など、丁寧に使っているのに、一年も経たぬのにボロボロになり、何度か新しいのを買いました。

私がこの大学の創設によって、迎えられて専任の教官となったとき、私のファイトは、この大学のため、即ち学生諸君のためただ一筋ということに集中されました。創立最初の年は、学会にも一切出張せず、約束の著書の執筆も延期してもらい病気も押して出講し、一回も休まなかった(?)ように思います。掌中の珠を失ったようなさびしい思いで、第一回の卒業生諸君を送り出した今の私は、老いの到るを忘れてなおせめて学校のことにつくすということにファイトを燃やしてゆくつもりです。そしてこのファイトがあるかぎり私は健在であると考えていただいていいのです。皆さんもどうかそれぞれのファイトをそれぞれの有用なことに燃やして、人の世の役に立つよう心がけて下さい。

偶感

佐々木伸二

けさ八時、見送りのため、京都駅の新幹線の乗場に急ぐ、途中、構内のエスカレーターに乗った。すぐ前に人が立ち並んでいたので仕方なく立ち続けながら考えた。前にいる人たちは立派な体格の持主で年も若いが、なぜ段々を登って前方の人まで詰ないのだろう。また、その前方の人はなぜ段々を上ってそのまた前方の人まで詰ないのだろう。そのまた前方の…。あの人たちはエスカレーターを登るのはエティケットに反するとでも思っているのだろうか。エレヴェーターで地だんだ踏むのとは全然話が違うのだが。私はあの人々から見ればずっと年をとっているし、しかも、きのうは新幹線で東京から夜半まえにここについている。それでも、前の人が立ちはだかっているのがもどかしくてしようがないくらい上りたくてむずむずしている。いつか、人気のないエスカレーターを一気にかけ登った時はほんとにせいせいしたものだ。エスカレーターの人々はなぜボンヤリと魔法にかかったように立ちすくんでいるのだろう。昔、ロンドンの地下鉄のエスカレーターを駆け上っていった若い人たちの元気な姿が、こんなときいつも眼の前にチラついてくる。

大切な原稿（この原稿ではない別の）の締め切りが近づいたので誰にも会うまいと決心をして机に向った。そのとたん、私の研究室を出た若い人が自分の発表した、かれの生涯での最初の論文の別刷を嬉しそうに見せながら玄関に立った。夏休みも休まず研究室で勉強しているかれが今日の日曜に訪ねてきたことは極至当然かも知れない。しかし私は決心している。残念ながら決心している。それでも私には居留守が使えない。玄関に出てねんごろに今日から十日間、鬼になって仕事を続ける決心した旨を告げて引とってもらった。ああつらいなあ、としみじみ思

ふるさとのこと

「倉敷」

岡　恵子

「ふるさと」この言葉のどことなくなつかしいひびきに、更になつかしさを加えてひびく「くらしき」これが私のふるさとです。

もと〳〵倉敷は、戦国時代江戸に運ぶ備中米の集散地として栄えたことから、自然倉屋敷が立ち並ぶようになり、そこから「倉敷」という名前が生まれたと言われています。舟の出入りしていた堀割の両側には、深い軒先、太い柱、厚い白壁、それを更にかんじょうに見せる貼瓦（はりがわら）、そうした家が軒並に続いており、掘の水面にまで垂れた柳と相まって一層落着きを見せる古いたたずまいの街です。しかし、この倉敷がただ単に古いたたずまいと言うだけでなく、現在の文化の香り高い倉敷にまでなったのは、やはり、美術、科学としての独自のものを持っていたからでしょう。中でも最も有名な大原美術館は、昭和の初めに造られたもので、ギリシャ神殿風の建物と、その中に収められている泰西名画の数々は、実にすばらしく、現在ブリジストン美術館と

並んで私立洋画美術館の双璧と言われています。この美術館の刺激を受けて、戦後、すぐ近くに倉敷民芸館、倉敷考古館もでき三者相まって他に見られぬ文化的景観を呈しており、又、科学面では、水星発見で有名な倉敷天文台や、農業研究所等があり、ますます文化都市の呼び声が高くなったのでしょう。

文化都市と言えば、京都も勿論そうですが、不思議なことに、京都と倉敷とは、実によく似た感じの街だとお思いになりませんか？　先日も或る外人を案内していましたところ、京都と倉敷とは実によく似ており、しかも日本のベスト2だと盛んに言われ、一人で喜こんだものでした。倉敷に生れて十八年、そして京都に住んだ四年間、共に同じイメージの街で生活できた私には、どちらが第一のふるさと、そして第二のふるさととは区別しがたいのがいつわらぬ気持です。京都も倉敷も共に、私にとってはすばらしい〳〵ふるさとなのですから。

いながらペンを取った。するとまたベルがなる。八幡（北九州市の）の森田さんですと家内の取つぎ。よしと覚悟をきめてて玄関に迎える。大分古い私の教え子です。「忙しいでしようね。」「挨拶にも閑とはいえない。実は誰にも会うまいといま決心したところだ。しかし、まあ上り給え。」「では十分程。」それが一時間以上話して辞去した。ペンを取る。すると今度は大切でない方の原稿が気になり出す。気になることから片付けて行きますと毎日、朝晩、神様に約束をしているので、それを実行することに決心。それで現在この雑文を書いている次第です。お尻に火がつくとペンがすべり出す。凡人の一つの証拠です。お陰で、もう四枚目が一杯（一六×一五字詰）になる。さあ気を許さずに一気可成、速く、速く。

夏になってから、涼しいので台所で食事をすることにした。案外台所の雑然たる光景が気にならない。家内は家内で、台所と食事部屋との往復運動が省けるので楽だと喜ぶ。それならもっと早く実行すればよかった、と後悔する。冷蔵庫が古くなったので、コンプレッサーが始終働きつづけているのが気になる。冷えすぎてもスイッチが切れぬ。温まりすぎてもスイッチが入らぬ。つまり鈍感になったのです。私の頭のようにある日、食事をしているとコンプレッサーが珍らしく止った。というよりも止ったので今まで動いていたのだなと推定した。考えてみればおかしなもので、音を立てつづけているとかえってそれに気が付かぬ。止ったので気がつく。逆さまのような気がするが事実は事実。ローソクが消える瞬間、一段と輝きを増すように見えるのも同じ心理現象かも知れぬ。これはおもしろいとは思うが、そんなのんきなことを言ってはおれぬ事もある。栓ひとつねじれば水が出る。ガスがでる。当然すぎることとして平生は気にも止めていない、どこかでガス管工事をしている。台所で火をつける。初め、残りの圧力で大きくついていた焔がみるまに細っていく。水道栓をひねる。出るどころか猫の喉のように、ゴロゴロいって栓つついていた最後の一滴まで吸いこんでしまう。こうなるとはじめて水道やガスの存在がたちまち大きく強く感じられる。親が生きている。子供はほとんどその存在を意識しない。ふとどきなやからは、厄介にさえ思うことがあるという。それほどでなくても、親はいつまでも生きていてくれるかのように錯覚する。これは私の経験でもある。父は、母は、日一日と体力が衰えて、一歩一歩死に近づいている。この事実をなぜもっとはっきりと意識できないのであろう。それは変化があまりにもおそいので、同じ調子で働き続けているコンプレッサーのように、意識から消えるのであろう。せめてローソクの短くなるほどにでも親の命の衰えが感じられぬものか。そうしたら、世の不孝者の数はうんと減るだろうに。私も、その不孝者の一人になってしまった。今では何のすべもない。

先日、小学校前の舗装道路を校門に近づきつつ北をむいて歩いていたら「文徐行」と大きく黄色で路面に書いてあるのにはじめて気がついた。私はマイカーを持ち合わさぬので気がつかなくても差支えはないが、これまで何度通ったかも知れないのに何という不注意者だろう。と思いながら校門前を通りすぎたら、また「文徐行」の大書に出くわした。まえの「文徐行」は上手とも思えぬが大して下手とも思わず不問のまま見のがしたが、今、眼前に現われた「彡彡文」は何という不格好な書き方なのだろう。もう全市内ではずいぶん沢山書いただろうに、少しは上手になれぬものだろうか。あの「文」は大きすぎる。「彡」の縦の棒二本が平行でない。殊に先すぼまりは貧相だ。あの「彡」の小さいこと。やはり縦の二本の棒が先すぼまり。こんなお手本を毎日見せつけられたら子供たちの習字は上達どころか……。学校当局は一体何……。通りすぎながら、ふと気づいたことがある。そこで後をふりかえって見なおした。こんどは「文徐行」がまともに見える。そうだろう。そうなくちゃおもしろくない。ここで科学者精神を発揮してやろうと、カンカン照りの道路を校門前まで引き返して南方をみる。前にまずまずと思ったのがこんどは「彡彡文」になって頭でっかちのオーバイネ（O-Beine, X-Beine, に対すドイツ語。英語のbandy legs 対 knock kneed に当るものですが、そのものずばりの表現が気にいっています。戦前の日本の女性には、坐らされた結果で無格好なO-Beineが多かったが、戦後派は正常化した美しい脚線美を惜しげなく誇示している。

Apres better than avant の一例。）に変っている。それは、そうだろうとも、校門から飛び出す学童に見せるための文字ではない。かれらを車から護るためなのだから、そうなくちゃ。もうすっかりペンキ屋側になってしまった。序にもう一つ。あの先すぼまりは遠近法の原理によって平行線がそう見えたのではないはず。ペンキ屋が故意にオーバイネにしたのでなくてはおもしろくない。

（同調から主導へ。これが科学者の常用手段です。）ご苦労さまにも、「文」の頭の辺のほてった地面に顔を持って行き、「行」のへんとつくりの縦の棒の遙か行くさきをねらってみる。無限遠で両者が交われば平行の証拠であるが、つい四、五〇メートル先の電柱の根元に集まっているではないか。予言は当ったと心の内で手をたたいて喜ぶ。他愛もない科学者遊びの一場面。ニコニコ顔でもしようものなら、さっきから「あれ、ちょっと変じゃないの。」と見ていたおかみさん「アッ！ニヤニヤ笑ってるよ。やっぱり……。」私はそんなおかみさんがいたのか、いなかったのか、とんじゃくなく、北を向いてある思いに沈みながら歩きつづけた。学童を車の渦から護ろうと、細いところまで気をつけて書いてくれた「文徐行」を、その気も知らずにあざ笑うとは……。同じようなことをこれまでいくつ犯して来たことであろう。これからさき、どれくらい犯さねばならないのであろうか。

（四〇、八、二九）

編集後記

野山や並木の木々も色ずき、いよいよ秋も深まってまいりました。ここに同窓会会報創刊号「The Marian」をおとどけ出来ることをうれしく思います。タイトル「The Marian」は、学長様が名ずけて下さったもので、例年ならば、タイトルにちなんで、マリア様の被昇天の祝日、八月十五日に発行することになっていますが、今年は何分初めての事で、遅くなってしまい、マリア様の祝日の今日おとどけすることになりました。

シスター方や、先生方、同窓生の御協力を心から感謝しております。「The Marian」が、ますます充実したものとなり、同窓会が発展することを私達幹事一同は祈っております。

（山仲、斉藤、奥島、後藤、辻、日高）

その後

細辻あけみ

▽京大に通うようになって早や七ケ月、時々京大のキャンパスで同じように勤めている友達に会ったりすると、つい三十分、一時間と長い立ち話をしてしまう。いつも私達の共通の話題になることの中に、興味深いことがある。人間として立派である、いわゆる尊敬される人物とはどうあるべきかについてよく議論する。発端は我慢ならない不平からであるが、話すことは、単にストレス解消ではなく考えさせられることがある。

世の中のしきたりは知らないが、いざ出てみると、学校生活と違って時間もルーズだし、五時終了時間以後遅くまで残されると、慣れないので癇にさわる。これが世の中かと思ったりするものの、不満やるかたない。その不満というのは、相手の人格を無視する事、或いは軽視することであり、その人の非常識な言動にある。例えば、こちらに大切な先約がある時にもそれを断わらせて全く急に、時間外の仕事を押しつけられる等。たまには、仕方なきことと思っても、毎日続くと人権無視とそのルーズさに怒るのもさて置き、その人の人格を疑いたくなる。自分の分野にのみ秀いでていてもだめ、常識と鍛練された人間性をかね備えていない人は私は尊敬できない。

最高の学問を修めている人々の間にいても、真に尊敬できる人に出合うのは、ごく稀れである。

「人の振りみて、我が振り直せ」という古い諺にある様、尊敬しえる人同様、尊敬するに価いしない人からも学ぶことはある。私も含めて、兎角、人を批難しがちであるが、私達は色々な人に出会い、その中で揉まれて、先ず自分自身の成長、人格形成に努力すべきである。

八尾恵子

▽大学を卒業してはや三ケ月、教師として職についた今でも、まだまだ学生気分の抜けない私です。三カ月間、つまり一学期間、毎日〳〵が長く思えた事もありましたし、今思えば、早く過ぎたとも思います。この一学期間は、毎日が新しいものずくめでした。かわいい中学一年から、年令もたいして差がない高校三年までに、毎日接しているのですから、学生気分の抜けないのも当り前かもしれません。こんな事が、六月のある日にありました。私は、雷が人一倍大嫌いです。ゴロゴロ、ピカッだけで、職員室では、一人でキャーと言ったり、カーテンを締めたりしているその私が、教室へ行っては、こんな事も言えません。授業中、私の嫌いなものが光り鳴り始めました。例にもれず、生徒は、キャー、そこで私も同様にキャーを言えば駄目、心の中では、「いやだなあー」と思いながらも、「何ですか、こんな事位で。はい、次に進みますヨ。」これだけ言うのに私にはどれだけの勇気がいることか……。

教師というのは生徒と先生ではなく、人間対人間だと思います。それだからこそ、これからも苦しいことも、いやなこともあるでしょう。しかしそれ以上に、喜びや嬉しさ、楽しさといったものは、より多くの人とも味わえ、幸福感も大きく感ぜられます。これを書いている内に、学校や生徒達の顔が浮んできました。あら、ぽつぽつ私の立場が分りかけてきたのかしら。

中村磯子

▼学校を卒業して間もなく、私は自分の卒業論文について、新聞に発表する機会を得た。そして新聞の力の大きさを改めて知った。と言うのは、記事がのってから、見知らぬ人から色んな手紙が届いたからである。無記名の、半分、脅迫のような手紙やあなたの意見に賛成するというのまで、実に、様々なのがあった。

その中で、二人の男性から、期せずして、同じ意味の手紙をもらった。それには、女性が大学教育まで受けて、卒業後は家事手伝いとして家庭にとどまるなんて、それでは受けた教育が泣くというのである。大学で学んだ物を、社会に出てせめてその万分の一でも還元するべきだというのが、彼等の共通した考えである。これを読んだ時、私は、まだまだ大学を卒業する女性の少い今日、世の男性は、私達に何かを求め、期待している事を痛感した。それと共に、何かを還元しなくてはと強く感じた。

私が社会に還元出来るものは、何だろう。私が大学で学んだものを、最大にいかす事の出来る場は家庭である。学んだ事すべてを注ぎ込んで、立派な家庭を作り、次の世代を背負う立派な人間を世の中に送り出す事が、私に出来る、最大の社会への還元ではないだろうか。この仕事が完成された時、私は、立派に社会に還元出来たと信じる。

スイートホーム

—五十嵐園子—

結婚つていいものよ

気違いのように髪を乱れさせてタクシーが止ったのは、コンクリートのアパート（社宅）の前だった。見わたせば一面の畑と原っぱに少々場違いな感じの建物、これなら誰でも迷わずに訪問できるし、ゴミ〳〵した所の嫌いなソンコにはぴったりの感じ。一階の端っぽのドアに五十嵐氏の名刺が張ってあり、その横に「園子」とペンで書いてある。ここぞとばかりブザーをブーブーブー、パッとドアが開き、ミッキーマウス的ヘアスタイルにパミュダパンツ姿のソンコ奥様が相変らずの京都弁で「さあ、よう来たなあ、スッポ抜かされたかと心配してたんや、どうぞ入って、そうでも十二時ジャストに来るとはさすが、カッパ、アンコやわあ……」。「我々の予定としては十時過ぎに来るつもりだったのが東京駅で遇然シスター・マダレン・マリーと出合い立話しに時間のたつのも忘れ、こんな時間になってしまったんよ」と言いわけがましい事をボソ〳〵、「あゝ、もうだめ早く御飯〳〵」と早速テーブルの前へドカリと座り込む。実は我々二人四日間の高原旅行の帰りに東京へ出てきてゲルピンチ。ソンコの所へ行けばなんとかなるともちろん昼食をあてにしてたし、ソンコの方でもあてにされると思っていたらしい。まめまめしく冷いおしぼりと飯物を出してくれ、それから手早くトマト、ピーマン、玉ねぎをきざんでミンチといため、ケチャップで混ぜて「ハイ上り」とスパゲティーの昼食。我々の「おいしい〳〵」の連発にソンコ「そうでしょ、私のお料理の腕前は確かよ。現に主人は私の毎日のほっぺたの落ちそうな御馳走で身が引きしまって、スマートになったし、それにお料理の数も豊富よ、今まで一度も同じ御馳走作った事ないのよ」といばる事、いばる事。その上だんだんのろけ出してあつい事〳〵最後には「貴女達ふら〳〵しないで早く結婚しなさい。結婚っていいものよ」ですって……。

ついこの間まで一緒にキャ〳〵言っていたソンコがこの小さなスイートホームの女主人として手作りのテーブルかけやお人形でお部屋を飾りたて、掃除、洗濯等々をデレ〳〵とうれしそうな顔をしてやっているのを見ると我々二人も知らず〳〵ニヤ〳〵してくるのだった。

（青島景子　安藤なつ）

会員消息

卒業してはや七ケ月、結婚生活、社会生活、そして花嫁修業と皆様大はりきりです。まずおめでたいベビー誕生のお知らせから、南（西願）七月九日〇〇君、友松（中西）〇〇子ちゃん。結婚組は三月には有木（大東）、中村（的埜）、小堀（外山）川口（松室）、四月には五十嵐（谷口）、福井（谷村）、目下、新家庭設計中の婚約組は森岡、松岡、河辺、内藤、（以上の方々は十月挙式予定）。実社会に腕をふるっている方々は（カッコ内は勤先）、福島（京都貿易協会）、一重（京大防災研究所）、細辻（京大医学部病理）、興水（新阪急ホテル）、前田（日本自転車会館）、松井（京大基礎物理学研究所）宮川（京大防災研究所）、中村宣子（ノートルダム女子大学）、西森（中外炉工業株式会社）、大橋（信愛教諭）、岡（倉敷大原美術館）、岡本（池坊学園）、小笹（京大理学部数学教室）、佐山（ノートルダム女学院教諭）、沢田（大日本スクリーン）、関（大建被服株式会社）、高屋（成田山文化会館）、外村（ノートルダム女子大学）、遠山（京大理学部化学教室）、辻（ノートルダム女学院）、森宗（コイラス神父研究室）、山本純子（プリオット神父研究室）、藤井（ノートルダム女子大学）、長谷（高山種苗株式会社）、中村美帆（ノートルダム女学院修道院）、須磨（横山株式会社）、鈴木（京都トヨペット株式会社）、八尾、青山（ノートルダム女学院教諭）。真鍋（鳥居鉄工所）、長谷川、河村はアメリカに留学中。その他の方々はおけいこにアルバイトに、毎日いそがしい日々をすごしつつ、短き青春を楽しんでいる。

最後に皆様の御健闘をお祈りし、併せて他人事とせずに、大学同窓会のため、御協力をお願いいたします。

（昭和四十年八月現在）（敬称略）

同窓会だより

第一回ノートルダム女子大学同窓会総会は去る六月二十七日（日曜日）に当大学に於て行われた。多数の参加のもとに同窓会の活動に活発な意見がかわされ、次のような事が決められたので報告いたします。

一、年中行事

総会　毎年五月第一日曜日

役員改選、（全同窓生より選出）

前年度経過報告及び本年度行事計画新同窓生歓迎パーティ

学長様の日　文化祭第一日目御ミサ、プレゼント

二、同窓会会報

発行日　毎年八月十五日（聖母マリア被昇天の祝日）

三、同窓会会館設立基金募集のための講習会

四、その他

奨学金制度（同窓会費利子より）

総会終了後神父様、シスター方、先生方をまじえ、なごやかな雰囲気のもとにティーパーティに移った。朝から降っていた雨も午後にはあがり、久しぶりに晴れ間のみえる梅雨空のもとで私達は三ケ月ぶりの再会を喜び合い、よもやまの話に花を咲かせた。ささやかながらもバラエティーに富んだ進々堂特製のメニューをつまみ、またそのあい間に本田先生、オドノフイユー神父様、石田先生、山口先生の意義ある又興味深い話に耳を傾け、親ぼくのひとときを過した。

お願がい

一、住所を変更なさいました方は、お知らせ下さいませ。

一、御意見がありましたら、同窓会役員までお伝え下さいませ